夕刊
磐城新聞
三月二十四日發行
發行所 磐城新聞社
〔日曜祭日翌日休刊〕

幼稚園を正しく認識して下さい（一）

内山憲堂

一、幼稚園の必要な理由

『幼兒期に於ける三ヶ年は其後大學迄の十數ヶ年の教育に勝る』とペレーは云つてゐます。教育と云ふ意味を小さく考へますれば、小學へ入學して智的教育を受け出してから後のことを指すのでせうが、大きく考へますれば小學校入學以前から教育は始められねばなりません、これが『教育』の正しい解釋であります

それで入學前の幼兒の教育は主として家庭に於てされるのが普通でありますが、家庭によつては自分の家が完全な教育が施せない家庭があります。例へば兩親共に生業に追はれて、子供を教育する暇いないもの一人子でしかも友達のないもの、婢僕の手に委ねられる場合、等々であります。それから家庭に於て偏ら又は智識の缺除から幼兒の取り扱ひを間違はれる場合が可成り多いやうに考へられます

これ等の家庭に代つて家庭の延長として幼兒の教育をするのが『幼稚園』なのであります

それでありますから『幼稚園』を小學校の準備機關であると考へたり『物を教へるところ』であると考へるのはいけないので、幼稚園はどこまでも、家庭教育の補助であり、家庭の延長であります。幼稚園の不必要論を唱へる人があるなればこの意味に於てそれは間違ひであります

二、幼稚園を理解すること

幼稚園によつては小學校の準備教育のやうなことをしてゐるところもあるさうです。又幼兒に無理な仕事を教へるところもあるさうですが、これは幼兒を入園させてゐる家庭にもその責があります。父兄があまりに、幼兒への効果を求めやうとしてゐないでせうか。高い月謝を拂つて入園させたそれの代償として幼稚園卒業直後の或種の野心を得ようとしてゐるのではないでせうか

ふるさと遠く

富慕子生

ふるさと遠くはなれ來て
心しみじみ日の暮れる
異郷の空の七ッ星

誰も知らない想ひ出を
胸にさとして西東
ゆくへ定めぬ一人旅

忘れたはずの人なのに
殘る想ひの俤を
一人旅寢の夢に見る

わかれ〳〵のせつなさに
結ぶ夢さへちり〳〵と
消えてつめたや假枕
あてない旅と知るものの
思ひなほしてさすらへば
宵路の空に流れ星

信濃にて

相良しづか

○樅林ぬけたるはての大なぞへ傾斜に立てば山頂かたぶけり

○見はるかす山のとがりは雪かつぎ一きは高し穂高たか山

病愁

細川久

○花をさげ包みかゝえて見舞ひ給ふ夫ゆゑかなしわれの病は

○のぞみなき病と人に聞かされて今更に見いる腕と爪の色

○たち切りしこの黒髮ののびつくる頃は癒えんかわがいたづきも

建國祭

小野務平

一從神武立楓宸
正朔二千六百春
瓜瓞連綿御皇統
萃黎同護大瀛濱

春待つ心

素風

寒梅や灯火入りし窓あかり
陽を留めて公園の南梅咲きぬ
料亭の雪しづもりや梅の花
新築の校舍まぶしく雪解けす
温床に青きを見たり雪を掃く

3月25日
△幕府の遣米使節ワシントン著（萬延元）△大阪、神戸兩市電話交換業務開始（明治二六）△我國初の裝甲巡洋艦淺間進水（同三一）△郡下に烈風吼ゆ（昭和一〇）

勉強は酬ゐらる 第三校優等兒童

（尋一ノ一）國井辰三 鈴木忠雄 中野正二郎 高野亮二 鈴木隆平 石澤芳己 諸橋廣綫 星野忠太郎 （一ノ二）諸橋政良 佐々木芳弘 吉田實夫 菅野託典 鈴木七郎 川又常治 加美山四朗 菊地次夫 （一ノ三）吉田綾子 三森貞江 遠藤正子 丹後藤毓子 新妻貞子 野増江 田渉芳子 仁井モト 菊地アイ子 （一ノ四）鵜沼アイ子 鈴木光子 鈴木ミチ 本阿彌秀子 根本瑞瑠子 古市佳子 猪狩セツ子 草野節子 遠藤テル子 諸橋典惠 （二ノ一）大峯壽美 橋本勇夫 鈴木喜男 根本久彌 綱代嘉一 田口光男 吉田晋 松崎昇 齋藤諴嗣 （二ノ二）根本正久 西野晃 谷島浩治 山崎晏 鈴木勇夫 高木賢司 小瀧口都三 志賀照明 小池丈夫 （二ノ三）田中千代子 矢代琴子 多田井操 小野寺美子 佐分和子 山田幸子 木田ツヤ子 新妻好子 （二ノ四）小野朝子 猪狩優子 佐藤久子 岡田米子 鈴木清子 關内瑞子 新妻キク子 鈴木和子 （三ノ一）井上通 本阿彌博 吉田正治 加美山清三 小泉武夫 淸野賢昇 芳賀武重 市毛敦 （三ノ二）金成俊男 福本寅雄 根本正 眞根井一 小松茂正 三井愼一郎 館内甫 古市眞三 （三ノ三）佐久間雪子 稻沼高子 渡邊津由子 丹野トヨ 伊藤禮子 村田淑子 眞柄美代子 遠藤千代子 （三ノ四）小宅スミ 永山智子 多丸マリ子 志賀タカ子 荒木顯子 青木綾子 中西カネ 古川エツ

（此項續く）

講談 黄金魔刃

(107) 高桑義生作 樋口悅也畵

紫巾黨（四）

稻荷山、島原屋が買つたばかりの地面は、まつたく燒け落ちて、餘焰が太い柱から吹いてゐるばかり。奉行所の役人が右往左往してゐるのであつた。前後の道ではない。島原屋はわたしの主家なんだ。安否を案じて駈けつけたのだ』

が、その言葉を聞く者はなかつた。捕吏は十手をふつた。そして口々に

『御用ッ、〳〵』

『わたしは……けつして、そんな人間ぢやないのだ』

と寛之助は、彼等を左右にかはして、懸命に叫んだが、役人は雲のやうに集まつて來た

寛之助の身體中に兇暴な血が煮えたぎつた。わづかに彼は我慢した。この無數の相手を向うにまはして爭ふのは無駄だと思つた。しかし、捕まつてはたまらない。犯した罪――罪なき罪に問はれてゐる自分であつた。島原屋の人々、わけてお染の身の上――その始末を目の前にどんと下されたのであつた。そして錦藏と東左衛門は駕籠を出た

『島原屋です。お役目御苦勞に存じます』

きびしい警戒であつた。何者を近寄ることは出來ないその中へ――

寛之助は飛び込んで行つたのだ。町方の者が前後から彼を包圍して

『誰だ？ 何處へ行く？』

『島原屋の燒跡です。身寄りの者です』

と寛之助は答へる

『怪しい奴……』

と、あまたの提燈がさしつけられる

『紫覆面……賊だ、紫巾黨だ』

と或者が叫ぶと

『御用だッ』

『神妙にいたせッ』

『待つてくれ』

寛之助は手を上げた

『そんな者ぢやない。僞り

立退先ぐらゐは知りたいと思つたがもういけない。逃れるほかに道はない

寛之助の心のひるむにつけ入つて、一人の捕方が蝗のやうに飛びついた。と五六人得たりと前後左右から折り重なつて、寛之助揉まれながらとう〳〵組み敷かれてしまつたのだ

『捕つた』

と揚々たる凱歌をあげる

『しまつた、畜生ッ』

寛之助は齒はかんだ。けれども絶望しなかつた。是非もない事だ――といふあきらめ、羊のやうにおとなしく繩にかゝつた

東左衛門と錦藏をのせた二挺の駕籠が役人に護られて、今寛之助の就縛の騷ぎと東左衛門は駈け集まる町方役人に丁重な挨拶をした

與力、同心――東左衛門の顏見知りはないが、警護役の者から正眞正銘の彼自身であることを聞いて

『いや、御災難、なんとも申しやうござらん』

『怪我人、燒死人はございませぬか？ 宿の者はここには誰も居りませぬか？』

と東左衛門は訊いた。たゞ一つ心にかゝるお染の身の上

『幸ひ左樣な者はござらんが、家財何一つ取出すことも出來なかつたやうでござる。家人は散り散りに逃れ――と申すのはこの火は恐るべき賊の仕業、つまり火のほかの危險を感じ、身を以て逃れたわけ、さいせんから家人の立退場所を調べて居るが、今以て判明いたさん』

『左樣でございますか。たゞの一人……も』

あまりのことであつた。東左衛門は深い失望と不安を感じた

（お染は、賊のために奪はれたのではあるまいか）

役人に引かれながら寛之助は何かわめきつゞけてゐる

醫學士 吉田久雄
吉田眼科醫院
平町紺屋町 電話六八番

外務社員採用
◇世界三大會社の王◇
◇經驗の如何を要せず◇
◇追次主任又は支部長に昇進◇
◇進んで地方監督又は支配人となる◇
將來實業界に獨立せんとする入社希望の方は履歴書持參せられたし（但身許保證人アル者）
本社 横濱市中區山下町二十二
申込所 平町田町
シンガー裁縫機械會社支店

下痢病妙藥ヲ御紹介致シマス
天下一品散
平町ネヅミ坂角
特約店 桑原商店
『辰次販賣元ニ應ズ』

廣告

生徒募集
希望に燃ゆよ!! 佑賢は待てり!!
◇教授訓練の徹底
◇授業料の低廉
◇奨學金の給與
◇主要學時間數の増加
◇受驗本位相互研究會
磐城佑賢學舍 電話九三番
○中堅國民は佑賢中等科より
○受驗難關突破は佑賢專修科より
○新學年より學舍長令息東京帝大法學士大和田忠良氏就任
迷はず一路佑賢へ！

外科、內臓外科
エツキス光線科
新設……產婦人科
院長 安齋徹
醫學士 黑澤廣
入院隨意
平町田町
安齋醫院 電話四七五番

お醬油は……ヤマフル
鹽屋
山崎合名會社
福島縣平町
電話（營業部一〇番 本店二七番）
味噌 醬油 たひら正宗 鰹節 食料品
明治生命磐城代理店 山崎與三郎

古レコードと蓄音器
買入……
皆樣御家庭にて既に御不用となつたものでも何處の店よりも高價に買ひます。
平町三丁目
天地堂 電話五八九番

看護婦及ビ見習看護婦 募集
年齢十八才以下
織田齒科醫院 平南町

送り物に
鰹節と干やなぎ
魚問屋
平町四丁目 電二一三

社員採用
固定給參拾圓外手當支給
二十才以上五十五才迄
希望者は履歴書持參本人來談
平町鍛冶町十八
債券 公債 社債 現物賣買 擔保貸附
日本商事株式會社平支部

友部株式店
平町三丁目
電話一七七番

返應即座、即時乞御試
オレンヂパスタ
神經痛、リウマチス、咽喉痛、筋肉痛、肩のコリ、
福島縣平町字新町二十二番地
桑原整骨院 電話六七四番

1936
御入學・御進學・
美事なファイン・プレーをなされた御愛兒樣へ!!
小店にては聊か右御祝と日頃の御愛顧に酬ゆる爲左記の通り奉仕特賣致します。記念として何卒御用命の程伏して御願ひ申上ます。
流行と實用とを兼ねた
責任保證附 腕時計
定價金七圓五十錢ヨリ（ゴム又は皮バンド附）
萬年筆 定價八十錢ヨリ
ビクター・コロンビア ポリドール
特約店 金光堂時計店 平町五丁目

小店員募集
頭と身体の働く人
西村屋藥局 平 電 二・三

ミシン學生募集
◇地方唯一の洋裁專門學校
新學期 四月五日
申込は今――絶好期
氣安く習へる個人的教授
ミシン使用無料材料貸與
本校は學費の要らぬ學校
新設――夜間教授
……校則二錢切手要す……
磐城女子洋裁學院
平町二丁目二番地

春暖かに 三小學校修卒業式
—今廿四日擧行—

平町三小學校の修卒業生（第一）一、四三四名（第二）一、四八七名（第三）一、二一三名合計四千百三十四名に對する修卒業證書授與式は今二十四日午前九時より夫々擧行され各家庭では證書を前に兒童を中心として螢雪の成果を喜び合つた、受賞者は別項の如く優等七百二十七名、進步二百一名、外九名、合計九百五十一名である

	優等賞	進步賞	部會賞	外	計
第一	二八九	六二	五	二	三五八
第二	二四九	七五	七	七	三三八
第三	一八九	六四	二	｜	二五五
計	七二七	二〇一	一四	九	九五一

外は（第一）室櫻闘傳刊行會長賞（第二）同窓會賞である

大野幸作 片寄誠 金成篤 鯨岡喜代治 郡司光男 草野ヨシオ 小泉德二 佐藤正男 佐藤仁 佐藤芳長 佐藤正二 佐原平二 坂本敏郎 坂本貞一 齊藤彌三郎 齊藤金三郎 常陸馨 志賀幹司 鹽武雄 椎名ミツ枝 須藤六藏 薗部芳一 高木久 豐田一 東條壽一郎 德田四郎 戸松祐一郎 永山七五三松 新妻七郎 根本継代 若松雅雄 畑山梅治 羽賀誠 星野近男 村田敏 松本泰 山内良衆 柳内榮一郎 山崎七平 吉田正夫

今日ぞ喜びの日
—平第二校優等生—

一

（尋一ノ一）根本ヨシエ 高木珠世 石川美子 神長倉公子 下山田方子 小齊春子 田卷まさ子 谷口壽子 鈴木辰子（一ノ二）菅波典子 佐藤絮子 益弘幸子 服部桂子 安齊照子 力丸美知子 齊藤英子 宮川幸子 關原トシ子（一ノ三）明智節子 眞木靖子 市原惠子 阿部美子 藤田曜子 關內美佐子 瓜田けい 菅田久子 大谷清子（二ノ一）安藤敏子 髙田玉惠 三井正子 阿部比奈子 增尾幸子 髙橋茂子 蛭田伸子 鈴木玲子 永島ユキ子 桐原純子（二ノ二）梅森紀子 關內陽子 渡邊マサ子 大井川喜代 中根和子 小谷ツカ子 加藤衛子 小川幸子 鈴木エチ子 草野キン子（二ノ三）原貴美子 高木和子 吉田昭子 田巻嬌子 小松久子 横山ケイ 石田カツ子 菊地キミ 志賀壽子 江川信子（三ノ一）草野トシ子 黒木雅子 高野靜枝 海野和子 鈴木悦子 佐藤惠美子 倉田洋子 髙橋道子 青天目照子 磯上照代（三ノ二）猪狩敏子 海老根京子 山野邊敏子 佐藤玉江 小原喜惠子 山本タカ子 增子ミネ 庄司コウ 鈴木智惠子 涌井千枝子（三ノ三）花澤久子 中村里子 佐々木雅子・鈴木清子 松本啓子 眞野八重 桑田康子 飛田絹枝 關內喜代子 佐藤文子（四ノ一）田卷隆子 清野光子 會田美智子 髙木良子 櫻庭滋子 清野俊子 鵜沼敬子 橋本トミ 星野春 扇藤澄子（四ノ二）菅野榮子 中野靜子 山中久江 中根總子 遠藤ミツ 山崎榮子 淺野瑛子 增井ヤス 飯沼俊子 野崎貞子（四ノ三）井坂京子 柴田三保子 正木田鶴子 村上まさ 木村イミ 酒井正子 吉田輝代 吉成照子 小齊峰子 鈴木靜（五ノ一）千葉怜子 五十嵐澄子 大和田キヨ子 黒木智子 小川米子 山野邊公子 大柴貞子 東條正子 渡邊なが子（五ノ二）千葉富子 鈴木蘭子 早川和枝 馬目輝子 柴田離苦子 梅森道子 矢田部富子 有賀貞子 石川サエ子（五ノ三）大嶺悦子 桑原貞子 靑木美代子 長瀨多美 佐川行 伊東滿佐子 遠藤睦子 中島弘子 坂本郁子

電報の電話送達
民衆の聲に聽從し 愈々明日から實施

本局では電話の速達を圖る爲電報の電話送達を試みる事となり過般來電話加入者の諾否を取まとめて居つた處賛成者數參百貳拾名に達し愈々明廿五日より實施の事となつた、本制度は電信線上に於て短時分に取扱はるゝ電報が配達の爲に往々長時分を要する缺點を除く爲で今回試みに行ふものであるか次の種類の電報は本方法に拠らないと

官報 暗號電報 照校電報 親展電報 新聞電報 改文電報

從つて右以外の電報で電話加入者に宛てたる電報は局へ到着すれば直ちに電話により一と先づ電報の內容を通報することになるのであるが、通報後の電報送達紙は後刻時間を決めて配達することになつてゐる

佑賢卒業式

磐城佑賢學舍第二十三回卒業證書授與式は今廿四日午前九時から擧行したが卒業生左の如し

◇中等科 江尻光平 猪狩太兵衛 猪狩良夫 岩崎六郎 宇佐美金廣 鵜沼博 小野忠治 大友昇 片寄大上 郡司榮吉 佐藤時正 四家司郎 下山田善 鈴木弘意 鈴木德市 鈴木英雄 鈴木三郎 高萩嘉農雄 高木誠 高原充 高橋眞平 永山政右ェ門 新妻髙信 古川榮八郎 水野寬 松崎淸 馬上弘元 山家博孝 吉野恭平 渡邊孝 渡邊末治 渡邊伊佐雄

◇專修科 荒川忠男 阿部文好 青木義明 阿部政常 猪狩久雄 遠藤眞一 飯島トシ子 大井川等 大谷長平 大友富男 大内テル子 大田正隆

藤田校卒業式

藤田女學校第五十一回卒業式は來る廿七日午前九時から擧行するが當日は恒例により卒業製作品を陳列公開すると

女中を雇ひませんか
紹介所斡旋に大童 卒業女生徒の新傾向

小學校卒業兒の就職斡旋に大童の平職業紹介所では目下連絡各小學校から提出される兒童の希望職業に基いて夫々求人口を開拓中であるが、これら就職希望兒童中例年ごく少い女中志望の女生徒が今年は非常に多く、或る學校からは七名も『堅實な處へ世話して下さい』と願ひ出てゐる

これは某學校長の話しでは『女は將來良妻賢母になるのが目的だから將來に備へるには何と云つても實際家庭に入らねば役立たぬ』と云ふ處から來たもので同所でも目下適當な處を物色中である、年令は何れも十五、六才、求人希望者は早速同所に申込まれたいと

川中子分團員奉仕

好間青年團川中子分團では山田分團長以下三十一名出動昨二十三日午前七時より午後六時半迄川中子地內約半里の通學道路改修に從事しその美擧を喜ばれてゐる

松井東北振興局長 三大炭鑛視察

東北振興事業として要望されてゐる火力發電所設置の候補地たる平町附近視察のため松井東北振興事務局長は昨報の如く昨二十三日夜八時沼尻から縣乾應務課長と共に來平、今二十四日は朝來磐炭、入山、古河の三大炭礦を詳細視察し午後二時十五分平發磐越線で福島に向つた

山間方部民を潤す 第二次凶作對策工事
積雪に惱され今月末竣功

平土木監督所管內に於ける第二次凶作對策工事は總工費三萬餘圓で去月末着工、何れも山間部なので積雪に惱されながらも着々進工を見、はや九分通り出來上つて居るが同工事は今月末迄に是非竣功せねばならず期日も切迫してゐるのでこれが督勵のため縣土木課鈴木書記外二名は昨二十三日來郡、こゝ四、五日滯在する事となつた

晴やかに笑む
平第一校優等生

一

（尋一ノ一）柴田章夫 赤塚信一 伏見彥長 佐藤紀文 鈴木淸司 手塚可一 髙野和夫 生天目德治 伊藤利平 村上哲夫 菊地三夫 岡田早苗 柳內巖（一ノ二）髙淸水明 薗部武久 藤田丹 吉成晴保 大和田武夫 鵜沼秀夫 鈴木久一 長谷川信之 國井敬夫 鈴木秀明 飯塚弘 岡山一之 佐々木寬 蓮沼淸夫 佐々木直也（一ノ三）扇藤俊一郎 山下勝勇 菅野達雄 馬目修義 小林昌一 田中敏郎 青木昭 永山正己 吉田實 山野邊邦弘 遠藤宗市 永木義一 鈴木良夫（二ノ一）石山達雄 水野昭之 鈴木章 長谷川直義 根本榮司 金子孫三 豊口皓 宇留哲雄 佐々木健夫 草野信三 菅沼健雄 伊東邦夫 髙屋謙二（二ノ二）國井英吉 飯島賢 渡邊眞一 根岸乾雄 堀亮 石川慶一 岩本堅一 小林智年 舘野宏 小野弘雄 鈴木利彌 渡邊忠弘 山崎光雄（二ノ三）山崎慶一 正木和夫 市原亮二 松本昭 金成芳男 萩原和雄 井幡正 仲島幾吉 杉山勇一 林富昭 松本和郎 阿部進 菊地嘉昭（三ノ一）髙階要 千葉文彥 水津由雄 佐川英一 新妻唯一 小齋幹夫 長谷川稔 菊地武彥 三井隆夫 市原二良 加藤登 馬目隆雄 坂本剛（三ノ二）大嶺慶一 淸水宣政 小野健二郎 志賀惠三 淺原信一 鈴木啓吾 吉田昌八 中澤涉 古市光之 髙崎明彥 見山敬一 草野秀夫 端山節男（三ノ三）大和田一郎 髙木勇 田代浩康 作山和男 本多英夫 椿塚弘文 綠川昭 早川昭夫 鈴木俊夫 吉田勤 鳥海司郎 坂本俊雄（尋四ノ一）根本孝三郎 草野昌平 菅沼康裕 川崎縦男 豊口秀哉 志賀久平 安藤信 鈴木道雄 新妻安男 三浦甚一郎 佐藤善一（四ノ二）柴田秀雄 伊關次郎 佐竹五郎 關內正雄 鈴木仁 鈴木一男 山崎七郎 佐藤信男 渡邊勝也 藤田彌輔 伊關直治（四ノ三）柏木洋二 藤居喜一郎 青木信夫 吉成方義 阿部正義 田中輝郎 柴田實 鈴木德次郎 髙橋恒壽 吉田信夫 磯山一朗（四ノ四）國府田信良 小林茂 山崎靖夫 石田吉男 古川勝彥 佐藤義文 樋口博尙 馬目英一 牧野聰一郎 齋藤博

郡內の天津教徒 二百五十名を突破
愈々斷罪の日迫る

茨城縣磯濱町に本陣をおく邪教天津教に關しては平署に於ても先頃關係者數名を召喚取調べを行つたが更に縣特高課佐久間警部、小野寺警部補の兩氏は二十一日來平、平署特高係と共に某々二名を引致嚴重な取調べを行つた結果、有力な材料を握つて一たん引あげたが當局の內偵する處によると同署管內の信徒は百六十餘名、郡內では二百五十名を突破するものと云はれて居る

正當防衛に非ず
内郷、血の慘劇に 懲役三年を求刑
辯護士無罪論を強調

泥醉し兇器を携へた亂暴男をしりぞけんとして持つた締張棒の力が過ぎ相手を撲殺した當時內郷村宮字代六九居住田村郡大越村生れ前科八犯吉川幸太郎（四八）に係る傷害致死事件の第二回公判は今二十四日午前十一時から平支部で中島裁判長係り乃木、香西兩判事陪席、氏家檢事關與、千葉（官選）辯護士立會草野村靑年團員約三十名その他傍聽裡に開廷された、陪席判事一名變更あつたため再審理を開き幸太郎は前回通り『構へをなす餘裕もなく攻擊に出たものではない』旨を述べ、實地檢證の結果は狹隘甚しい兇行個所に於ける強打（死に到らしむるが如き）の可能なりや否やを場所と兩者の位置身長と天井、兇器（櫻の棒）と上肢の屆伸等詳細に檢した所、強打は困難從つてその際被告の姿勢が攻擊でなければ兇打は可能でないものと認定された、檢事は檢證その他に徵して防衛行爲でなく暴力行爲であること明瞭である、その動機を斟酌してと懲役三年を求刑、辯護士は被告は當初から暴行の意地なく、己れを防衛するため已むを得ず出た行爲である、兇行個所が強打に困難といふが咄嗟に出た行爲として可能と領け得る、程度を超えた行爲でないことも明かで刑法第三十六條（正當防衛）に該當するとて無罪論を強調、正午過ぎ閉廷した、判決は來る三十日午前九時

武次さんの第六感！
見事窃盜鮮人を見破り 縣刑事協會から表彰

內郷村大字御厩字上宿一三木賃宿白井武次（五二）さんは去る一月十五日自稱相馬郡中村町無職前科二犯鮮人仁奉佑（四三）が宿泊した際自轉車及リヤカー等を携帶してゐるので不審に思ひ直に平署に密告した處意外にも仁は數件の窃盜犯人である事判明したゝめ犯人逮捕に二十三日縣刑事協會から表彰された

願書締切る
平商が最難關

昨二十三日締切の平商を以て在平三中等校の入學願書受付けは閉ぢられた、各校の締切數左の如く最も其門の狹いのは依然平商で百人中四十九人弱の入學率、最も篩の目の細いのは磐中で六十六人弱の入學率である

	定員	志願者數	昨年同上
磐中	二五〇	三八三	三七八
磐女	二五〇	四三三	四八二
平商	一一〇	二三九	二四〇

不倫の女房に一擊
機械工の夫自首す

本町入山炭礦第六坑機械工原善三郎（四三）妻ステ（四二）は長女ハルイ（一七）を頭に五人の子供もあるのにステは最近同町台の山運搬夫星野竹之助（三七）と懇ろとなつてゐるのを耳にした善三郎は昨二十三日朝自宅でステに意見した處反抗されたのでカッ！となり手斧で妻の頭部に一擊を加へ全治十日間の傷害を與へ直に平署に自首して出たので目下取調中

小川江筋總會
約三萬圓を起債

小川江筋組合總會は明二十五日午前十時から平團体事務所に開く、新豫算は經常部六千七百七十二圓、臨時部三萬二千七百九十一圓、計三萬九千五百六十三圓で十一年度に施工する平窪、神谷兩村に跨る江筋改修地元負擔金二萬九千五百圓が新に計上された、尚常設委員二名の改選がある

方面委員聯合會總會

第三回石城方面委員聯合會總會は明二十五日午前十時から內郷村淺野記念館に開き決、豫算を附議後左記事項を協議、終つて內務省社會局囑託早崎八洲氏の講演（題未定）がある

一、結核療養施設の擴充を圖る實行方策 一、方面委員として公私社會事業施設との連絡を圖る具体策 一、方面委員として連絡すべき公私社會事業施設なき場合に執るべき方策 一、方面委員事務研究組合町村

天氣豫報
小名濱測候所

今晩は南西の風晴、明日は北西の風晴一時曇

二十五日（小名濱測候所觀測）
日出 五、三五　月出前 六、二五
日沒 五、五三　月沒後 八、三三
滿潮前四、一五　干潮前一一、一〇
後五、三〇　後一一、二〇

舊三月三日　水曜　丙午　大安　參宿　新三月二十五日

諸判定施術 東京市本郷區湯島四丁目五番地 高島易斷總本部 神誠館

▲一白 難儀に會するもさ折せず勉めよ病盜難注意▲二黒 怠けず乘氣となり扱幸ならぬ事あり▲三碧 天與の福利を受け家道大に繁榮する大吉日▲四綠 勝手勝手の處行は一身を過つ分に安んぜよ▲五黄 勇氣活潑に過ぎて進退を過り易き注意の日▲六白 氣變前後を窺ふ如き日過ぎて安全を期せよ▲七赤 損失多く利得する事少き日病危盜難注意▲八白 外交には宜しけれど內事には過ち多からん▲九紫 誘惑に乘らざれば安全常業に從ひ利得多し

御入學近づく！
三月二十三日より四月二十日まで
新入學ご御進級の御祝として通學服一着又はマント一枚お買上の方へ……もれなく
粗品進呈
男子部 小倉服 〇、九〇ヨリ　サージ セル服 二、六〇ヨリ　防水マント 〇、九〇ヨリ
女子部 水兵服 一、六〇ヨリ　スカート 〇、五〇ヨリ　防水マント 〇、九〇ヨリ
外に…春物洋服及びレンコート各種取揃へました。
信用堂洋服店 平町三丁目 電話六一三番

開院
外科一般 特ニ內臟外科 皮膚科 肛門病科
北川外科
レントゲン科 物療法科
平町新川町（諸橋醫院跡）
醫學博士 北川芳夫
醫學士 奥 義弘
イツデモ入院デキマス。 電話四六四番